

『伊集院水雷戦隊再出動す。目標はベラ・ラベラ島。』
基礎知識篇その二十四——空母編の第十八部

伊集院松治大佐に課せられた任務は極めて過酷でした。コロ島の日本軍主力一万二千人を救出できただけでも奇蹟的な大成功であったのに、文字通り一日も休む暇なく、すでに米軍海兵隊を主力とする連合軍が相次いで戦力を増強し、圧倒的に優勢となっているベラ・ラベラ島から、六百の孤立部隊を救出するという作戦です。

この日本軍は、八月十五日に米軍海兵隊の先遣隊部隊が奇襲上陸した直後の八月十七日に、日本軍の先発隊として派遣された部隊で、鶴屋好夫陸軍大尉が陸海軍全体の指揮官となっていました。この時の輸送部隊を護衛したのが伊集院松治大佐です。護衛中の海戦で彼の四隻の艦隊は駆逐艦二隻を小破しましたが、上陸隊輸送には成功しています。

日本海軍としては、この十日前のベラ湾の夜戦で日本軍が四隻の駆逐艦隊のうちの三隻を失うという大打撃を受けた衝撃が大きく、しかもその主因がアーリー・バーク新戦法によることを知らなかったため、或る種の危機感の渦中に在りました。

一方の米海軍は、蛙跳び（リープロッグ）作戦の予想以上の成果に自信を持ち、のちの十月六、七日の海戦と併せて一連の二作戦を総称して「Battle of Vella Lavella」の呼称を与えました。大局観からすれば米軍側が正しく、従来の日本側で通例となっているような、個別の海戦の勝敗を論ずる方法論は徹視的に過ぎ、正確性に欠けています。この時期、この海域での戦いが、実は南太平洋方面での戦いの真の意味での天王山だったのです。

この天王山の主役となったのが、意外にも従来の太平洋戦史では全くの脇役として無視されてきた伊集院大佐だったのでした。

鶴屋隊の小部隊も同様に、予想外に大きな意味を持っていました。

コロ島方面の戦況が危機的となってきた結果、鶴屋隊に対する補給はほとんど期待できなくなってきました。それでもどうにか生存可能だったのは、彼らに対峙したニューギニア軍が敢えて強攻作戦を取らなかったためと思われませんが、食料・弾薬の補給が危機的状况となり、この時期にはついに最終決断を迫られる段階に追い込まれていました。正否を問わず救出を決行するか、断念するか、その決断です。

レンドバ島では結局守備隊を救出できず玉砕させ、コロ島では救援部

隊の犠牲はあつたものの、ほぼ全軍を救いました。今度はどうするか、難しい判断です。陸軍の場合は、インパール作戦が代表するように、中枢部の作戦指導そのものに一貫性がなく、これが致命的な損害をもたらしましたが、一方の海軍は、この時期には厳しい取捨選択を断行してしました。総合戦力の著しい低下が明白だったからです。

そこでまず五月のアッツ島の玉砕があり、七月のキスカ島の救出の決断が続きました。総合戦略としてはこの決断は正しかったのですが、取捨の捨を決めるのは非情の決断というしかありませんでした。

今回の場合、中央部での最初の決定は「玉砕訣別」であり、次のような電報の記録が残されています。

——最後ノ一員マデ全力ヲ大君ニ捧ゲ皇国武人ノ荣誉ヲ全ウセヨ。

ところがコロ島救出作戦が成功したことで混乱が発生しました。第八艦隊が玉砕命令を撤回し、鶴屋隊救出に方向転換したのに対し、ラバウルの第十一航空艦隊本部がさらにその方針転換に難色を示したのです。

ラバウル側としては、すでに上空の防衛自体も危うい時期に、前線の防衛陣に短期間でも粘って欲しいという切実な願望があつたのです。

なぜか種子島少佐の著書ではこの間の真の事情についての詳細は語られておりません。また戦後に至っても、ソロモン後半戦軽視（或いは無視）の一般風潮の中で、詳細を論じた文献も存在しません。

そこで、少佐が示唆するように、不可能と思われたコロ島撤収を成功させた以上は、残るベラ・ラベラの鶴屋隊を放置することはできないという強い意志が当事者に働いたと推定するしかありません。

また、その強い意志を裏付ける幾つかの事実も存在しているのです。

最終的に現地で撤収作業が開始されたのは、十月六日深夜二十三時五十分、完了が翌七日一時十分。僅か一時間強の短時間です。これだけでもいかに周到な準備が行われていたかが推定できるのですが、伊集院隊の出勤決定はさらにその前日の十月五日午後五時ころで、コロ島撤収がまだ完全には終わっていない時間帯です。伊集院大佐はこの頃すでに、ベラ・ラベラ救出の決意を固めていたことを明示しています。

この第二次救出作戦では、伊集院隊は駆逐艦夕雲を失うという犠牲はありましたが鶴屋隊の脱出は成功し、米軍は第一次のコロ島撤収戦と併せて、ベラ・ラベラ海戦と呼び、特に第二次の伊集院大佐の救出作戦については、次のような公式の判定を下しています。

第二次ベラ・ラベラ海戦についての米海軍側の結論。

『日本軍は米海軍駆逐艦一隻を撃沈、二隻を大破し、残存守備隊の完全

撤退を成功させたという戦術的勝利を得た』と。
驚くことに、この重要海戦は、従来の日本側の一般の文献ではほとんど無視されてきていました。

ベラ・ラベラ救出作戦の決断

そこでここでは、有力出版社や著名研究者らの文献ではなく、奇蹟的に残された駆逐艦関係者による証言で、最近編集された「駆逐艦物語」一二〇一六年発行を中心に検証することにします。ここでは若干の誤差はあるものの、おおむね米側の数字とも一致し、全体として正確な描写と判定できるからです（詳細はこのあと）。

ところが二つの重大な疑問ないしは課題が残りました。

その第一が、おそらくは大本営の名で通達されたはずの命令が、どのような経緯で撤回されたかであり、第二が海戦そのものの実態です。

前者に関しては、すべての関係者が口を閉ざしており、真相を明記できる状況ではありませんが、極めて強固な心証があります。

それはまず最終責任者である伊集院大佐の強い責任感と意志です。

米海軍側という八月の第一次ベラ・ラベラ海戦では、伊集院大佐が自ら指揮・護衛して鶴屋隊長以下の少数部隊を敵中に送り込みました。

その後の中部ソロモン方面全体の苦戦の中で、彼らはいわば置き去りにされてしまったのです。この事実が終始大佐の念頭から去らなかつたのは、おそらく否定できない事実と判断できるのです。

いまその絶好の救出の機会が訪れました。コロ島撤収作戦に際しては第八艦隊司令部の事前命令を無視し、駆逐艦を輸送に決行した彼にとつては、ここで鶴屋隊を見捨てて凱旋する選択肢などは、初めから皆無だつたと考えるのが、むしろ自然な発想なのです。

幸運なことに、この時の第八艦隊司令長官は鮫島員重（ともしげ）中将（海兵三十七期）でした。彼は戦記にも登場することの少ない地味な提督ですが、戦後自ら進んで豪州軍に戦犯として出頭し、部下を庇つたという人格者でしたから、おそらく彼が第十一航空艦隊の説得に当たつたものと思われまます。

これが第一の幸運で、第二の幸運は草鹿任一中将の存在でした。

南東方面艦隊司令長官の草鹿中将は第十一航空艦隊長官を兼ねていましたが、彼も三十七期の同期でした。戦後にあのアーリー・バークが日本海軍の中から選び帝国ホテルの晩餐会に招待した中の一人です。

ラバウルでの草鹿中将は、陸軍に対しては生来の硬骨ぶりを発揮。しばしば対立して非難も受けたようですが、終戦に際しては豪州軍が陸軍の今村將軍一人を交渉相手とする提案を拒否し、自らを海軍側代表とさせた人物です。しかも戦犯問題に関しては何も責任を自分一人の責任と主張し、担当の豪州側の心証を好転させたという記録もある点から、本質的には鮫島中将と同様な信念の人でした。

こうしてひとたび通達された玉碎命令の取消しという、前代未聞の経緯によって、鶴屋隊六百名救出作戦が開始しました。

周到緻密、かつ大胆な作戦展開

これまで有力出版社や、著名な海軍研究者たちから無視され続けてきたこの海戦でしたが、幸運なことに今度の「駆逐艦物語」では、第三水雷戦隊夜襲部隊の旗艦「秋雲」の通信士兼航海士の立山喬中将の詳細な手記が収録されており、細部まで記録されていますので、煩を厭わずに摘記することにします。

- ① 鶴屋隊の残存総人数は約六百名。うち海軍三百は米軍の八月十五日の上陸直前に上陸。陸軍はその後の増員。以降の消耗に対して付近の遭難者の収容による増加があつて、当初とほぼ同数の生存者数。
- ② 九月二十八日以降、水上偵察機以外の補給なし。
- ③ 伊集院司令官の搭乗する旗艦は秋雲。夜襲部隊駆逐艦は計六隻。
- ④ 輸送部隊は駆逐艦文月など三隻。揚陸用舟艇隊は小発六。浮船三十。
- ⑤ 収容部隊は駆潜艇、特設駆潜艇等三隻以上、艦載水雷艇三、大発一。
- ⑥ 協力航空隊は九三八空ほか戦闘機隊。

事前打合せ十月五日。先遣輸送部隊出動は十月六日午前三時半深夜。

伊集院司令官の旗艦への乗艦は午前四時二十分。艦長は相馬正平中佐（五十期。ちなみに伊集院大佐は四十三期）

十八分米軍機発見。スコールに避難。以降、米軍航空隊と駆逐艦隊の追尾を巧妙に回避しながら目標地点へ。

二〇時三五分、駆逐艦風雲米巡洋艦三隻発見（実は駆逐艦の誤認）。

二〇時五七分、敵巡洋艦一隻撃沈。

二二時一分、米駆逐艦に魚雷命中。

同五分、夕雲に米軍魚雷命中。

同六分、米軍駆逐艦二隻沈没と認める。

二二時七分、米駆逐艦一隻火災。

この前後、夜襲隊最後尾の夕雲に集中砲火。二一時五分魚雷命中。
なお、米軍の別動隊の駆逐艦三隻は戦場に急航するも間に合わず。

米軍の駆逐艦を巡洋艦と誤認するなどの幾つかの誤りがあるものの、立山中尉による記録は防衛庁戦史部に所蔵され、原文のまま保存中とされているとのこと。

こうして日米駆逐艦隊が激しい戦闘を展開している間に、収容部隊が目標地点に上陸し、短時間に作業を完了して避退してしまいました。

収容者五八九名。七日朝八時五十分、ブイン基地に帰着。

従来 of 戦史ではほとんど無視されてきたこの作戦は、本来はガ島、キスカと並ぶ三大撤収作戦とすべきものです。特にここでは、旗艦秋雲以下の駆逐艦隊の奮戦と、大発、小発、浮船などまでを総動員して対応した末端の兵たちの、細部での緻密な創意と努力が光彩を放っています。

ガ島、キスカでは周到な事前準備が作戦成功に大きく貢献していましたが、今度の場合は事前準備の時間的余裕がないのにこの成果でした。

この点を正当に評価する者が稀なのも、残念かつ遺憾な事実です。

また日本海軍では、コロ島撤収作戦が二回に分けて実行されたことから、ベラ・ラベラ撤収戦を第三次「セ」号作戦と称することもありますが、全ソロモン戦を通じての最大の転換点がベラ・ラベラ島戦であるのを重視すれば、米軍の呼称が正しいと思われず。これと比較すると、ラバウル防衛を目的に最高三万人以上の兵員を投入したブーゲンビル島防衛戦は、先にラバウル攻略を放棄していた連合軍作戦を考慮すると、明らかに連合軍側の作戦の勝利でした。

伊集院大佐は、この作戦の翌月十一月一日、少将に昇進。しかしさらに戦い続け、翌年五月二十四日、乗艦「壱岐」の撃沈により戦死。中将に昇進。同期百人のうちの中将昇進者僅か五名のうちの一人としてようやく名が残されています。

次回、彼の生涯に敬意をこめて一度空母編を離れることにします。

(この稿終わり)